平成１７年３月１日発行

かまぼこ

第１５号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

地域と共に生きる　荒井　八千代さん

今回は、日赤の重鎮『荒井八千代さん』を紹介します。

「甘いものが好きでしてね。甘党なのですが、お酒も好きですよ。この歳まで、生き長らえてきたのは、あまり物事にこだわらず、くよくよしないで暮らしてきたからではないでしょうか。」と荒井さんは、つやの良い顔をほころばせながら、長寿の秘訣をそんな風に語ってくれました。明治四二年生れの97歳。初対面の人なら、その立ち振る舞いから二〇歳は若い年齢を想像するに違いありません。

大森・鹿島神社近くの荒井家の一人娘として生まれ、15歳で関東大震災を体験。21歳で結婚して以来、現在の地、西蒲田二丁目での生活が始まりました。太平洋戦争の末期には、『B29爆撃機』の襲来を受け、焼け跡の片付けに奔走したそうです。

荒井さんの活動で紹介しなければならないのが『赤十字奉仕団』です。戦前から母アキさんの熱心な活動を間近に見て、自らも奉仕団の輪の中に入ったといいます。『大森日赤病院』の創設にいろいろと奔走し、その功績が認められて、昭和五八年に中曽根首相から勲六等寶冠賞が授与されました。また、三十数年に及ぶ民生委員活動も含め、長年の奉仕活動に対して数々の感謝状が贈られています。「大した活動をした訳ではありませんが、少しずつ積み重ねてきたことに対するご褒美をいただいたと考えています。」

荒井さんのお話の中で、面白かったのは、ご自分の性格を語った件でした。「私の性分と言えば、間違ったことが嫌いで黙っていられない事です。議員さんでも区長さんでも何方でも思ったことを話します。これは私が女だから言えたことだと思っています。男だと喧嘩になってしまうでしょう。しばしば、言い過ぎたかなと反省するのですが、周りの人達から『あなたが言ってくれたから良かった』と声をかけられ安心することがありません。そういえば母は『あなたは男に生まれていれば良かった』と言っていました。」

趣味も多彩です。6歳から琵琶を習い、師匠の域にまで達したそうです。ただし、琵琶については、ご主人が好ましく思わなかったので、押入れの奥にしまって、そのままになってしまったそうです。代わりに手を染めたのが日本舞踊でした。自宅には、舞台で踊る写真が飾られています。その初舞台は、80歳の時だったというから驚きです。生け花についても蓮沼中学校で長年に渡って生徒を指導していました。

大森から西蒲田へ。明治、大正、昭和、そして平成の今日まで、荒井さんの歩みは、地域の『生き字引』と言っても過言ではないでしょうか。これからも健康に留意されて、末永く達者でいてほしいものです。

（取材　山崎、六車、瀬川委員）

呑川今昔

源流から河口まで

「砂の器」の一シーンより

呑川右岸JR鉄橋の地下道から刑事役の丹波哲郎と森田健作が顔を出し、御成橋の方へ歩いている。森田が「犯人は白いスポーツシャツを着て返り血を浴びているから遠くには行けず、土地カンのあるものだ。」と主張するのに、丹波が「スポーツシャツは処分すればそれでいいじゃないか。それになあオイ人目のつかない空き地やだネ、この辺りのドブ川にだって捨てることができるヨ。」と扇子で呑川の方を差しながら言う。一九七四年当時は、全くのドブ川だったのだろうか。

（映画　砂の器　松竹一九七四年　監督　野村芳太郎）

呑川の源流

呑川の水源と言われているのは、大きくいって三つあります。でも、それは三カ所の湧き水というのではなくて、あちこちの湧き水が大きく三つの流れになって呑川と呼ばれる川になっていったのです。

呑川は、世田谷の桜新町からくる流れが本流とされています。本流とは、河口からみて一番遠い水源をもつ流れです。

二番目は、柿木坂支流です。本流とは東横線・都立大学駅付近で合流します。

三番目は、九品仏川です。本流とは緑ヶ丘駅付近で合流します。

もうひとつ、清水窪湧水などを集め、一度洗足池に注いでから道々橋付近で合流する洗足流もあります。また、昔は六郷用水とも池上で合流・分流していました。

以前は、雨が降ってもその水は、林の落ち葉や田んぼに蓄えられ、川の水は徐々に増水したのですが、市街化が進んでくると降った雨は地面にしみこんだり、林や田んぼに蓄えられずに呑川も以前にも増して暴れ川となり、しばしば氾濫するようになりました。

一方、林や田畑がなくなると台地へ水がしみ込まなくなるので、地下水が補給されなくなり、湧き水は減少して、川への水の供給は減少しました。しかも、家庭排水が川に入ってくるなどで、湧水から廃水へと水の供給源が変わるとともに、川の水がどんどん汚れ、淀み、腐敗して汚臭を放つようになりました。

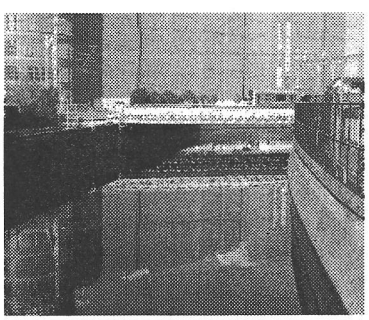
こうして呑川は「ドブ川」と呼ばれ、無視されたり憎まれたりするようになったのです。そのうえ、水害を繰り返す呑川に文字通り「臭いものにフタ」というわけで、この厄介ものの川を見えなくする。それを下水道幹線として利用する。そして、その土地は遊歩道として利用できるという、一石三鳥のアイデアが生まれました。

これに従って、世田谷区内、目黒区内の呑川には蓋がされ、下水道管を入れ、下水道幹線になりました。この下水道幹線を集めた「呑川幹線」は、蓋がけのなされなかった緑ヶ丘駅付近から下流は、呑川と並行して道路の下に埋設されています。

こんなわけで、呑川へは世田谷、目黒区の湧き水は、一滴も入ってきません（平常時には）。ですから、この状態では「呑川の水源は、世田谷・目黒区にあり、本流は桜新町から来ている。」とは言えないのです。

大田区の呑川

呑川は、世田谷区、目黒区、大田区の三区にまたがる二級河川で、典型的な都市河川のひとつです。



蒲田駅付近の呑川

まず、呑川の本流は、新玉川線桜新町駅付近から暗渠で始まり、高速3号線から駒沢通りまでは、暗渠の上に親水公園が作られており、大井町線緑が駅付近までは、桜並木の続く緑道となっています。ここから下流は、長かった暗渠からやっと川が姿を見せますが、土手のある川ではなく三面コンクリート打ちの実用本位の川が続きます。

地下水の低下による湧水の枯渇と生活排水の流れ込みによる水質悪化改善のため、九品仏川が合流する少し手前の東京工大付近で、新宿区にある落合処理場で、高度処理した下水処理水が平成七年から放流され、水質はかなり改善されました。

ここから下流の池上本門寺付近までは、潮の満ち干きの影響はなく、コンクリートの河床ながら、さらさらと水が流れるので、適当に空気に曝され水の浄化はなされています。また河床に小段差をつけ、積極的に水を浄化しているところもあります。

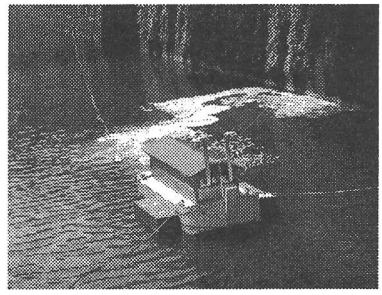
新幹線をくぐった少し下流の道々橋付近で、洗足池からくる洗足用水を合流します。現在、この用水には、湧水を利用してせせらぎを復活させ、用水沿いに散策路が作られています。

道々橋付近から第二京浜国道にかかる池上橋までの間には、川底に水鳥が止まるための石や魚が住むための窪みが作られたりしており、三面コンクリート打ちから解放される箇所があります。

池上本門寺付近から下流は感潮域に入ります。以前に較べ最近は、少し川の水がきれいになったので、河口からボラや鯉が遡上してくるのが、見られるようになりました。また、これらの魚を追って、ユリカモメやカワウが飛来してきます。池上通りにかかる堤方橋より少し上流に、旧六郷用水路が南から北に横断するように注ぎこみ、新井宿・大森方面に流した用水路跡が残っており、浄国寺橋近くには「ハッスン」「中土手」「六郷用水北堀」についての案内があります。

「ハッスン」は、池上四丁目にあった堰で、六郷用水を呑川や蒲田、大森方面に分水する施設で、八寸の角材が使われたことから由来しています。「中土手」は、西蒲田一丁目の双流橋まで、川の中に土手を築き蒲田方面に用水を供給していました。この中土手の撤去問題で、大森側と蒲田側の住民で争いが起こり、昭和六年十月、大森側により撤去工事が強行され、警察沙汰となり、決着を見るまでに三年の歳月を要しました。

西蒲田の双流橋から蒲田駅のJR鉄橋にかけては、平成八年まで屋形船の形をした曝気装置が、四台川面に浮かべられていました。この辺りは川の水が淀み悪臭がひどかったため、この装置で水中に空気を送り浄化しました。またこの辺りには川面に浮かぶゴミを集めるためのゴミフェンスも設置されています。



屋形船の曝気装置

旧呑川と新呑川

第一京浜国道にかかる夫婦橋の少し下流で、旧呑川は北東の方向へ蛇行しながら流れていましたが、現在は、この河川敷は埋め立てられ、呑川緑地に生まれ変わりました。東蒲田二丁目から大森四丁目までの一七〇〇mに及ぶグリーンベルトで、クスノキやケヤキの高木、ツツジやアジサイなどの低木で植え込みを造り、四阿、親水施設、広場などが配置されて、見事な景観を呈しています。

新呑川は、川幅ずっと広くなり、一直線に真東へ京浜工業地帯の工場群の間を貫いて、東京湾まで流れています。以前はノリ養殖用の小船が、たくさん係留されていましたが、現在は釣り船に替わっています。また以前、夫婦橋のたもとには、舟からの荷の積み下ろし場がありましたが、現在は傾斜のゆるやかな護岸になって、親水公園になっています。

夫婦橋から河口までは、土地の高さと水面とあまり違わないので、大雨による増水や高潮にも備えるため、護岸はいわゆるカミソリ堤防になっていて、川沿いを歩きながら川面を見ることは出来ません。

呑川の源流から河口まで、過去から現在へと、大雑把に辿ってまいりました。都市部を流れる河川と地域の住民とが、どのように共存して行くのか。使った水の後始末は、すべて行政任せという考えでは、住民に水質浄化の意識は育ちません。前述のゴミフェンスにしても、このようなものを設置しなくてはならないのは恥ずかしいことです。

※『呑川は流れる・2004（呑川の会編纂）』を参考にさせていただきました

（取材　小林、江尻、都築委員）

明るく安全な町づくり

安方南町会　直井かをる

一日の乗降客が、約三万二千人の東急多摩川線矢口渡駅を中心に、北に環状八号線、南に多摩川を望む、世帯数一六四〇、人口三二〇〇名の町会です。

昭和二七年に、安方南町会として発足し、以来五二年になります。一昨年の平成十四年六月には、多くの会員皆様の協力を頂き、町会創立五十周年の記念事業を執り行うことが出来ました。

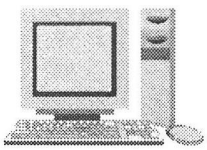
多摩川線と直角に交わる駅前通りには、花水木の街路樹が並ぶ矢口渡商店会があり、毎年八月に開催される「流し盆踊り」には、近隣地域を代表する大勢の踊子と見物客で大変な賑わいを呈し、夏の風物詩となっています。

秋には毎年、安方南北町会合同で、多摩川河川敷「歩こう会」が行われます。多摩川台公園を出発して、終着の安方神社まで。続々と到着する参加者を迎えるのは、地元の商店会や氏子青年部のメンバーです。早朝より食べ物や飲み物の用意をして待ち受けています。家族連れのバーベキュー大会の会場は楽しいオシャベリと笑顔であふれます。

昨年の八月より「明るく安全な街づくり」運動の一環として、夜間防犯パトロールが実施されています。月に三回、路地から路地へときめ細かなパトロールです。現在、参加者は各部の役員さんが主体ですが、町会としては、多くの方々に参加して欲しいと願っています。パトロールに限らず、町会行事に一般の会員が積極的に参加することが、町会活動をより深く理解して頂くこととなります。

平成十五年十一月に、インターネット上に当町会のホームページを開設いました。毎月の活動予定、活動報告や町会の仕組等、写真を多く用いながら皆様に親しみやすく、町会を知って貰いたいと努力しています。訪問の際は、「安方南町会」で検索するのが簡単です。URLは http://yasukatam.web.infoseek.co.jp/ です。

今後とも役員一同、「明るく住みよい安全な町づくり」に頑張って参ります。



事務局からのお知らせ

日本赤十字社東京都支部大田地区からの御礼とお願いのお知らせです。

昨年は、十月に新潟県中越地震、十二月にはインドネシアのスマトラ島沖地震があり、多くの人々が被害にあいました。

日本赤十字社では、義援金を募り、蒲田西地区でも多くの方々からの募金を頂き、ありがとうございました。しかし、被災地では、現在でも復興の途中であり、多くの方々が避難生活を送っています。

特別出張所では、昨年に引き続き現在でも義援金を受付けておりますので、募金される方は、特別出張所までお持ちください。よろしくお願いします。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，398人
	女	27，132人
	計	56，530人
世帯		29，175世帯

平成17年2月1日現在

編集後記

今回「わがまちの顔」で紹介した荒井八千代さんは、日赤蒲田西地区の役員を長年に渡り努めていました。出張所とも長い付き合いで、多くの区職員の間でも荒井さんの名前は知れ渡っています。

特集で取り上げた「呑川」では、本文でも紹介した「呑川の会」の資料を参考に記事にしました。その資料「呑川は流れる二〇〇四」は、読み応えのあるもので、ホームページでも見ることができます。興味のある方は、一度覗いてみてはどうですか。

最後に、町会紹介は「安方南町会」でした。前回、紹介した安方北町会とは、兄弟みたいなもので、現在でも仲良く活動しているそうです。ちなみに、「かまにし17」の編集委員長が住んでいるのもこの町会です。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五